

プレカンファレンス 2026

日本顕微鏡歯科学会

学術委員会 委員長：菅原佳広

広報委員会 委員長：池尻敬

プレカンファレンス 2026 担当：

神田善姫

藤野拓郎

マイクロスコープは歯内療法の間を変えたか

村野 浩気

歯科用実体顕微鏡の普及が歯内療法の精度を飛躍的に向上させ、その臨床風景を劇的に変貌させたことについては論を待たない。しかし、その根拠となる研究や報告はさほど多くなく、歯内療法領域においてこの革新的な機材が我々にもたらした恩恵は何なのか、実ははっきりとしていない部分がある。多くの臨床家が歯科用実体顕微鏡を歯内療法に必須のツールとしながら、その具体的なメリットについてはお茶を濁すようなものになってしまっている現状は非常にもどかしいものと言える。

一方で、拡大明視野の獲得がそのまま治療の成功を保証するわけではない。私のような、臨床に従事し始めた時点で歯科用実体顕微鏡が臨床の現場に存在した所謂「マイクロネイティブ世代」は、その環境を当然のものとして享受しているが、その膨大な視覚情報に翻弄され、根尖性歯周炎へのアプローチの本質となるバイオロジーやエビデンスを見失ってはいないだろうか。

私達は顕微鏡から得た視覚情報をどのように活用し、再現性のある臨床へと昇華させるべきか。高倍率下で見える微細構造をどう解釈し、どのような治療選択を行っていくのかの判断は臨床において必要不可欠な能力であるが、歯科用実体顕微鏡出現以前に先達はその視野の不足を何で補い、どう決定を下してきたのか。その真髄に迫ることは、近代化したとされる歯内療法の臨床において、一層価値を増しているように思われてならない。

本講演では、「マイクロエンドを極める」というテーマのもと、私達臨床家が陥りやすい情報の取捨選択における盲点を再検証し、治療に直結する臨床のポイントを共有したい。

略歴

2013年 神奈川歯科大学歯学部卒業

2014年 神奈川歯科大学歯学部附属病院研修修了

2014-16年 山水会杉山歯科医院 勤務

2021年 東京医科歯科大学大学院医学総合研究科 口腔機能再構築学講座 歯髄生物学分野 大学院修了

2021年 神奈川歯科大学歯内療法学分野 助教

2024年 神奈川歯科大学歯内療法学分野 特任講師

マイクロスコープ下での、 余剰根管・イスマス・髄床底へのアプローチ

清水 藤太

ロサンゼルス開業 / 日本大学松戸歯学部客員教授 /
UCLA (カリフォルニア大学ロサンゼルス校) 歯学部 卒後教育コース・インストラクター /
AAE (アメリカ歯内療法学会) 正会員

2026年現在のアメリカにおいては、エンド治療は当然マイクロスコープ下で行うものとされているので、「エンド治療」という言葉の中にすでに“with マイクロスコープ”という意味が含まれている。従って、それにわざわざマイクロという接頭語をつけた「マイクロ・エンド」という言い方は、実は語感的に冗長 redundant なのは、例えば 2026年現在“体温計”といえ、(かつて存在した水銀の体温計ではなく) デジタルの電子体温計に決まっているから、わざわざ「電子」体温計という言い方をすると必要以上にクドク聞こえる事と似ているかもしれない。

それほどエンド臨床に溶け込んだマイクロスコープであるが、その有用性が最大に発揮されるのは、やはり髄床底のマネージメントにおいてであろう。

治療初期段階である髄腔穿孔や天蓋除去はマイクロよりもむしろマクロの側面が大きく、治療後半の根管拡大・形成も根管口から数ミリも下ると湾曲等により視界が遮られるわけで、エンドにおいてマイクロスコープを活用すべき局面の多くは、その中間段階である「根管口の探索、髄床底の処理」にある。

本講演においては、MB2、MB3、DB2、MM、下顎前歯の舌側根、等の余剰根管の探索、イスマス等の髄床底の重要解剖形態の処置につき、豊富な臨床例をもとに解説したい。

経歴

- 1993年 鹿児島大学歯学部 卒業
- 1995年 保母須弥也に師事し局部補綴学を修める。
- 1998年 米国ロサンゼルス南カリフォルニア大学 (USC) 大学院 入学
- 2000年 同大学院を卒業、アメリカ歯科医師会認定歯内療法専門医取得。
- 2001年 カリフォルニア州歯科医師免許取得 ロサンゼルスにてエンド専門医として開業。
- 2013年 UCLA 歯学部にて、卒後教育プログラム・インストラクター担当

マイクロエンドを極める — 博学多才こそ最強の治療 —

辻本 恭久

日本大学松戸歯学部 診療卓越アドバイザー
付属病院特別診療室マイクロスコープ特診外来

歯内療法の術式、機器・器材、薬剤などはこの10～20年で大きく変わりました。それにはマイクロスコープの出現が大きな役割を果たしました。1990年代になりマイクロスコープ歯科治療が本格的に始まったわけです。これまで手探りだった根管治療がまさしく見ながらできる治療へと変わってきました。しかし、みえていてもできること、できないことがあります。2000年代になってCBCTが出現し、このデータによってますます根管治療の成功率が上がってきたのではないのでしょうか？でも、CBCTの読み方やマイクロスコープの操作法の知識がないとどうにもなりません。初期の頃はマイクロスコープを買ったけどモニタメントになってしまっている歯科医院が多かったようです。学生時代に教わったレベルでは解決できない問題が多々あることは皆さんすでにご存じだと思います。歯の解剖学の基本的なことを学んでいても、CBCTでみる根管系の複雑さは頭が痛くなります。どんな器具を使用して根管を切削すればよいのでしょうか？そのために様々な機器・器材が開発され使用されています。NiTiロータリーファイル、超音波チップ、レーザー等根管治療のために開発されたものはたくさんあります。そのコンセプトをきちんと理解しているのでしょうか？みようみまねで行ってないでしょうか？根管洗浄は水で十分だ、根尖病変に水酸化カルシウム製剤をしっかりと入れればいいんだといった知識や術式を信じている先生もまだいるかもしれません。広角的に色々な知識を正確に得ていないと治療が傷害になってしまう可能性もあります。今回はそれらの知識を少しずつですが、症例と論文から解説させて頂き、皆さんの臨床に少しでもお役に立てればと考えています。

略歴

1979年 日本大学松戸歯学部卒業
1983年 日本大学大学院松戸歯学研究科修了 歯学博士
1983年 日本大学松戸歯学部歯内療法学講座 助手
1986年 日本大学松戸歯学部歯内療法学講座 専任講師
1987～1989年 米国 Forsyth Dental Center 客員研究員
2005～2007年 松本歯科大学第二歯科保存学講座 教授（非常勤）
2006年 日本大学松戸歯学部歯内療法学講座 助教授
2007年 日本大学松戸歯学部歯内療法学講座 准教授
2010年 日本大学松戸歯学部歯内療法学講座 診療教授
2012～2017年 日本ウェルネス歯科衛生専門学校 校長（非常勤）
2018年 日本大学松戸歯学部先端歯科治療学講座 教授
2020年 日本大学松戸歯学部付属病院マイクロスコープ特診外来 臨床教授
2021年～松本歯科大学 臨床教授
2020～2025年 日本大学特別職 日本大学松戸歯学部付属病院マイクロスコープ特診外来
2025年～国立研究開発法人量子科学技術研究開発機構 協力研究員（量子生命科学研究所量子生命スピングループ）
2026年～日本大学松戸歯学部診療卓越アドバイザー

主な所属学会資格

日本歯科保存学会 専門医、指導医
日本歯内療法学会 専門医、指導医
日本顕微鏡歯科学会 指導医
先端歯科画像研究会 CBCT 認定医
米国歯内療法学会国際会員

主な受賞

鈴木賢策賞（日本歯内療法学会関東甲信越静支部学会）
デンツプライ賞（日本歯科保存学会）
鈴木賢策賞（日本歯内療法学会関東甲信越静支部学会）
優秀発表賞（日本歯科色彩学会）
優秀論文賞（日本歯内療法学会）
支部会長賞（日本歯内療法学会関東甲信越静支部学会）
学会賞（日本顕微鏡歯科学会）